

関東学院のびのびのば園 2021年度 自己評価の結果

学校法人 関東学院
関東学院 のびのびのば園
園長 仲程 剛

関東学院のびのびのば園では、この度2021年度の自己評価を行いました。本園の理念に基づき、2021年度の重点事業（事業計画）の進捗状況の振り返りをもとにその成果や改善点について、また日常の保育の中から見える本園の強みや課題について、保護者の皆さまや地域の皆さま、関係者の皆さま、そして本園の保育・運営に関心のある皆さまにもご報告させていただきます。

1 2021年度の重点事業

2021年度は、関東学院のびのびのば園が幼保連携型認定こども園となって10年目を迎えた年でありました。少子高齢化が進み、幼稚園や保育園、こども園が園児の定員確保に苦慮する社会情勢の中、また新型コロナウイルス感染が予想以上に深刻化し、長期化している中であって、本園の保育理念の柱（キリスト教保育、遊びを中心とした活動の中で主体性を育てる）に基づいた保育をきちんと行い、地域や保護者に丁寧にお伝えすることを大事にしました。

① 「夢と希望と愛に満ちたこども園」の確立

園のスローガンを教職員が具体的に実践できるように、祈る機会や職員会議での職員礼拝の時間、また園の保育理念を共有する機会を大事にしました。乳児・幼児ごとの定期的な話し合いの時間をもち、必要な研修計画を立案、実行しするようにしました。特に、園庭改造に向けての研修は年間を通して行い、新しい園庭の具体的な形を全職員で作り上げることを目指しました。

② 保育の質の向上を目指した、施設設備の充実

2年前に導入した保護者連絡システム等を含めて、本園のICT化の定着を目指し、安全面の強化も含めて更なる運営体制の改善を推進しました。情報共有がより有効にできるための視聴覚設備の整備、ズーム研修等のオンライン研修や情報共有するための情報機器端末の整備及びその管理体制の確立、さらには施設内外をカバーする安全管理システムの整備や園HPの充実を図りました。

③ 保育カリキュラムの充実

コロナ感染症がまん延する中、新しい日常習慣に対応できる保育カリキュラムを模索する一年でした。2020年度に設置した「にじの部屋」では、コロナ感染拡大防止体制に対応できる外部向けスペースとして活用し、未就園児のプレ保育、園児募集期における面接会場等としての利用を始めました。また、園内での栽培を通して「食する」をテーマに、世界で起こっている食糧危機、毎日多量に廃棄されているフードロス等を学び安全な食育活動の取り組みにつなげています。

④ 入園確保に向けての対策の強化

年々進む少子化は、新入園児確保の厳しさを増していますが、総合学園の中にあるこども園という特長を活かし、両小学校と連携しながら内部進学制度を推進しました。また、提携先小規模園から園児を受け入れる体制も強化するとともに、プレ保育を中心とした地域の子育て支援を充実させることで、入園確保につなげていきました。

2 取り組みの状況

① 「夢と希望と愛に満ちたこども園」の確立について

まずは職員間のコミュニケーションの機会を大事にするようにしました。園のシステム上、まとまった時間で打ち合わせや会議を取ることに難しさがありますが、月1回のカリキュラム会議や、エピソード記録の共有を通して、子どもの姿を共有し、保育環境の見直しや保育のあり方を話しあえた1年でした。コロナの影響で、外部の研修に出向くことは難しかったのですが、ZOOMを通しての学びや園内での研修を行い、保育、教育の質の向上に努めました。特に、「子どもの姿の共有」と「保育理念を形にする園庭とは」の2点を柱にして話し合いの時間を取る努力を行い、その中で園の理念を再確認したり、保育についてのお互いの思いや情報を共有したりすることができました。

キリスト教の理解・浸透という面では、コロナ感染症まん延する中でも、SNSも活用しながら保護者向けのバイブルクラスを継続して開催することができ、参加者の中から、地域にある（講師の所属する）教会の集会に出るようになったのは、うれしいことです。

② 保育の質の向上を目指した、設備施設の充実について

前年度に導入したICTを活用した園の運営管理システムは、園から保護者や職員への連絡、また保護者からの連絡のツールとして効果的に活用され、保護者からの信頼を得るのに大きく寄与しました。また、シフト管理や日常の園児の登園状況も運営・管理システムによって記録できるようになりました。しかし、日常的な保育や業務の記録の面では、まだ十分活用できていません。

多目的用途のためにリニューアルした「にじの部屋」へプロジェクターを設置し、園児の課外活動におけるの教具として活用されるほか、保護者の集会（バイブルクラス、懇談会）で活用されています。

安全対策のためのビデオカメラを増設したことにより、防犯・安全のための園児の動向の確認だけでなく、ケガや事故への対応、さらにはコロナ感染症対策にも効果を発揮しました。

ホームページのリニューアルと定期的な更新を行い、見やすくまた検索しやすくしたことによって、園の理念や現状を様々な形で発信するとともに、行事やイベント、さらには園児や職員の募集に関するタイムリーな情報発信を行うことができました。

③ 保育カリキュラムの充実について

前年度リニューアルした図書コーナー「ひかり文庫」の活用については、保護者による絵本の貸し出しはまん延防止重点措置期間中も継続できましたが、園内でのコロナ感染による休園等もあり、読み聞かせの活動ができなかったことなど、十分な活用ができたとは言えませんでした。

多目的用途の「にじの部屋」については、保育の場所の一つとして、土曜保育や少人数での保育、乳児の保育のみならず、課外活動の場所としても活用されました。また、未就園児クラスの部屋として定着し、子どもの活動だけでなく、講師の話聞く場や保護者同士の交流の場としても活用されました。

園庭の果実や園児自ら育てた野菜を収穫し食べる活動を行うことで、偏食の改善や食を大事にする意識の醸成につながり、また礼拝の中での食べもの（生き物）への感謝と畏敬を持たせるお話はフードロスの削減につながりました。なお、年少・年中児のクラスで取り組んだビュッフェ方式（一定程度の時間内に好きなタイミング・時間で食べる）の給食は、食の楽しみと共に、食べる量や時間を自分で判断する意識を育てることができた半面、食事のマナーや他への配慮、苦手な食べ物への挑戦という点からは、課題が残りました。

④ 入園確保に向けての対策強化について

内部推薦による関東学院系列小学校の進学は、進学を希望する個々の園児について両小学校と連携を取りながら、丁寧に対応することができましたが、コロナ感染症まん延の影響で、学院バスツアーおよび、年度末に計画した両小学校を招いての内部進学についての説明会は、開催することができませんでした。同様にコロナ感染症のまん延により、小規模保育園に出向いての園の説明・紹介も十分にできませんでした。結果的には、連携小規模園からの入園が2人ありました。

一方、子育て支援の一環であるプレ保育「ころりんクラス」が定着し、利用した方から2022年度年少クラスに入園した方が10人以上おり、入園確保に向けても大きな役割を担いました。

さらに、地域連携の活動をきっかけに、(株)無印良品港南台パズ店と連携することができ、エコバックやうちわの制作、親子で作る簡単レシピ集作りと活動が広がりました。レシピ集は、神奈川県内のほぼすべての無印良品に配布し、地域貢献の活動を充実させることができました。

3 2021年度を終えての成果と課題および改善点

2021年度は、昨年からの新型コロナウイルス感染が予想以上に深刻化・長期化している中であっても、日々の保育の場面で子どもや保護者と真摯に向き合い、その中でできることを考え、工夫して取り組んだことから、子ども園としての新たな可能性にむけて、一步踏み出した年であるとも言えます。

園関係者の感染による休園も数回ありましたが、感染症対策を徹底したことで、園内での感染の広がりは防ぐことができ、園児や保護者の活動や行事もほぼ例年並みに行うことができました。

日常の保育においても、登園方法、日頃の保育、行事内容についての見直しを図り、アプリを利用した保護者への通知、やりとりも迅速に行うことで、保育の質を維持することができました。

しかし一方で、休園や登園自粛により、長期間登園することできなかった園児がいたこともまた事実であり、その方々に対する配慮や対応が十分でなかったことは、大きな反省です。

今後も、感染症に限らず緊急事態における園の運営や保育については、様々な観点や情報をもとにした総合的な判断と、「一人ひとりが特別です」という、本園の理念に基づいた配慮や対応が大切です。

さらに今後とも質の良い保育をしていくためには、職員一人ひとりのスキルアップも大切ですが、チームワークが大切であり、子どもを真ん中において、共に保育を考えていくという雰囲気を作っていくことを大切にしていきたいと思えます。

2021年度は、地域との関係や子育て支援を大切にすることで、地域や保護者からの信頼と期待を得ることができ、結果として園児減少の傾向に歯止めをかけることができた年でした。

今後は、これまで取り組んできた地域との連携と子育て支援の充実をさらに推進し、子育てカフェの設置や小学生の居場所づくりなど、地域連携・子育て支援を本園の事業の柱とすることで、本園の存在と地域の情報を皆さまに発信したいと思えます。

2022年度に工事が始まる新しい園庭については、工事が完成することで終わりではなく、その特徴・特性を生かした効果的な活用や「遊びを通して自主性を育てる保育」のための園庭の活用について、実践をもとに研修・検討を深めることが大切です。

園の運営そのものについては、12月に行われた横浜市の監査において、大きな指摘事項はなく、保育教育の内容について、良い評価をして頂きました。

2021年度は本園が認定こども園になって10年目の年でしたが、そのことを内外に知らせ、本園の魅力や特色を広く周知するのは、満10周年として2022年度に持ち越すことになりました。

4 次年度取り組む重点事業（目標）

① 「夢と希望と愛に満ちたこども園」の確立

キリスト教に根差した保育理念の共有化と実質化を図り、職員間のチームワークによって「遊びを中心とした活動の中で、子どもの主体性を育てる保育」の発展・深化させます。同時に園内外での研修のほか、個々の職員がテーマを持った研修を行い、個々の職員の保育力と保育の質の向上を図ります。

② 保育の質の向上を目指した、施設設備の充実と効果的な活用

「園庭改造」の工事を終わらせ、実際の保育へ活用するとともに、園庭の活用・維持の仕方についてさらに研修を深めます。ICT化による業務の効率化や保育・教育の充実化が行われるよう、必要な機器の整備とともに、ICT活用研修の実施やICTを活用したシステムの構築を行います。

③ 保育カリキュラムの充実

新型コロナウイルス感染の終息が見えてきた状況を見据え、新しい日常習慣に対応できる保育カリキュラムを開発・推進していきます。特に、認定こども園の役割りの一つとしての「子育て支援」をさらに充実させ、本園の経営の大きな柱としていきます。「ひかり文庫」の活用を推進し、子ども達の絵本への興味関心を深め、読み聞かせを通して保護者や地域の親子にも貢献できる活動を進めます。また「にじの部屋」を、未就園児のプレ保育や学童期の居場所づくりに対応できる外部向けスペースとして活用します。さらに、園内での栽培活動と連携した食育に取り組みます。

④ 地域へ開かれたこども園の構築

のびのびのば園が認定こども園として10周年を終えた年にあたり、この園が野庭の地域に建てられ、幼稚園・こども園として地域の中に存在してきたことの意味を真摯に受け止め、地域と共に歩む園としての姿を確立していきます。特に、活動が軌道に乗ってきた未就園児プレ保育と子育て支援活動を内外に周知することで、本園が地域の子育て世代への支援の拠点となると同時に、外部との様々な連携を通して野庭地域の再生・活性化に貢献するように努めます。その中で、子どもたちや職員・保護者と地域の方々が触れ合う具体的な場面を創り出し、園と地域とがお互いに助け合う関係を構築していきます。

⑤ 安定した入園児及び入職者確保に向けての対策の強化

関東学院両小学校と連携しながら、総合学園の中にあるこども園ということを内外にアピールすることで、内部進学希望の園児の確保を目指します。また、提携先小規模園から園児を受け入れる体制も強化していきます。さらに、未就園児の保護者を中心とした子育て支援の充実を図ることで、保護者から選ばれる園になることを目指します。

入職者の確保については、大学等の保育者養成校との連携を図りつつ、保育実習の機会を活用して入職希望者を育てます。また、ホームページを活用した広報を行うと共に、計画性・継続性のある保育教諭募集活動を行います。